江戸の結婚経済学——婚礼の松竹梅

写真は、華鳳山人作、寛政八年（一七九六）刊『〈新板後篇〉嫁入談合柱』である。この書名は、既に刊行・流布していた鳥羽了怡作、明和頃刊『嫁入談合柱』の続編として出版したいという板元の要望に応じたものであった。鳥羽は、名聞や虚飾を排除し質素倹約を旨とした婚礼を奨めたが、これに共鳴した華鳳山人が、上中下の分限を考え、それぞれの式法を具体的に示したのが本書である。

その最大の特色は、左表のように上の上から下までの六段階の婚礼費用の目安を示した点で、結納品や嫁入道具の詳細を比較すると、上の上と下とでは六〇倍以上の格差になったと見込まれる。しかしながら、本書の主旨は、婚礼費用について認識不足の若い男女へその経済的負担の大きさを教えるためであり、婚礼にあり合わせの道具を代用することがあっても不満に思ってはならないとの戒めであった。

このような経済的記述に止まらず、婚礼の日取り、親への感謝、結納や媒酌人の心得にも及び、きめ細かい。

さらに巻末では「床盃（新婚初夜に寝室で盃をかわす近世の風習）」の際の言葉は生涯に関わるので、はしたない言葉や嘲りの言葉を口にしてはならないと戒め、穏当な言葉遣いまで例示しているのはいかにも念が入っている。

結納品上中下の違い

上の上	上	上の下	中	中の下	下
白金 ——	金子 300匁	金子 150匁	金子 75匁	金子 15匁	金子 15匁
白綸子 ——	白縮緬 180匁	白綸子 100匁	黒繻子帯50匁	モール帯40匁	鯛 8匁
緋縮緬 ——	紅 100匁	紅 100匁	綿帽子 6匁	綿帽子 5匁	御酒 2匁
紅 ——	綿 110匁	鯛 8匁	鯛 8匁	鯛 8匁	
綿 ——	熨斗 15匁	御酒 10匁	御酒 5匁	御酒 5匁	
熨斗 ——	鰹節 30匁				
昆布 ——	御酒 10匁				
鯛 ——					
御酒 ——					
9種	7種	5種	5種	5種	3種
——	745匁	368匁	144匁	73匁	25匁

白水編、寛延3年（1750）刊『婚礼仕用罌粟袋』では、家格により結納品を11種・9種・7種・3種の4段階に分けるが、本書では結納品を上記のように9種～3種（上の上から下まで）の6段階に分けている。上の上について具体的な金額を示さないのは、特権階級をはばかってのことであろうか。上以下を見ると各ランクとも次位の2倍以上である（表中の赤字は本文に金額を明記しないが前後関係で妥当な数字を仮に入れたもの）。

以上のほか、上・上の下・中の嫁入道具（家具類、衣裳･布団類、小道具類）の経費も示す（それぞれ合計54種9484匁、29種3473匁、24種1665匁で、次位の2倍以上の格差）が、嫁入道具は結納品の10～12倍に及ぶ。だが実際の婚礼では、さらに婚礼祝言や関係者への心付けや饗応など多大な出費を要した。

中流庶民の結婚・新婚生活マニュアル

仲人は　腹の後ろを　度々のぞき

＊本書凡例に「此書、高位高官の人の為にも著さず。牛馬を追い、車を周(ひ)く者の為にも著さず。唯(ただ)、農商中品(ちゅうぼん)の息男(むすこ)の用心に記すのみ」と記しており、自身を含む中流庶民の結婚指南書を意図していたことが明らかである。

写真は、文化五年（一八〇八）刊『婚姻男子訓(こんいんなんしくん)』と、その改訂・改題本である弘化三年（一八四六）刊『良姻心得艸(りょういんこころえぐさ)』である。挿絵は仲人に相談する図で、詞書きも一部異なる。本書は、津田正生(まさなり)（義（祇）宗・六合亭）が一六歳から三〇歳までの見聞や書物から得た結婚心得をまとめた書で、「三〇歳以後のことは未体験なので分からない」と吐露する。「遠方や他国の縁談は要注意」「縁談は相手の父母を吟味せよ」「七割良ければ上々の部類」といった実際上の助言に加え、男女の結婚適齢期、夫婦の年齢差、男女の相性や丙午生まれの迷信、血脈や遺伝性の疾患等にも言及し、総じて迷信・俗説に否定的な態度を貫く。また、適齢期の男性心得一九カ条では、結婚三年前から女色を慎み、その気がない女性や他人の妾に手を出すなと戒める一方、詐欺師まがいの仲人の例を挙げて注意を促し、夫婦の情愛や性生活にも触れている。

太田市立　縁切寺満徳寺資料館
〒370-0425　群馬県太田市徳川町385-1
TEL=0276-52-2276　FAX=0276-52-5311
ホームページ=www8.wind.ne.jp/mantokuji/

- ●開館時間／午前9時30分～午後5時（入館午後4時30分迄）
- ●休館日／月曜日（月曜休日の場合は翌火曜日休館）、12月29日～1月3日
- ●入館料／一般（個人）200円（20名以上の団体）160円／中学生以下無料／4館共通券300円／5館共通券450円

【禁無断転載】

江戸樂舎用

婚礼の松竹梅、仲人ビジネスから、失敗しない結婚や再婚の心得まで、
双六・絵本・女訓書・往来物・婚礼マニュアルが伝える江戸の結婚事情。

太田市立
縁切寺
満徳寺資料館
特別展

江戸の婚活

―出会いから結婚まで―

平成30年
11月3日
（土）
▼
平成31年
1月14日
（月）

左右の挿絵は、天保頃刊『神事行灯』3編（渓斎英泉画）・4編（歌川国直画）より（左上の「文を読む女性」のみ4編、他は3編）。

口説かれて 娘うちわを まわして居る

色直し後は 教えねど 承知なり

岡田玉山画、文化9年（1812）刊『女雑書教訓鑑』口絵「見合い図」。男女が「余所ながら相見する（少し離れて互いに見る）」とある。

幼女に婚礼を教えた『絵本婚礼道しるべ』

＊解説は次頁末尾

①見合い――見合いのことは一生を極むることなれば、互いにとくと見合わすべし。容色（器量）よきとて、つんとすべからず。女は礼儀正しく優しきこそよかるべし。

②結納の式――婚姻相定まりて後、聟の方より印を遣わす事也。又、「たのみ」とも云う。祝儀ものは身上相応にすべし。しかしながら、一代に一度の事なれば美を尽くすべし。結納（しるし）の多少によらず、目録に合わせ乱れざるよう並ぶるを使者の肝要とするなり。

③嫁入道具――古は祝言の夜に道具を送ることなりしが、今は勝手に一両日前に遣わすようになりぬ。さて、道具は身分相応に遣わすべし。あながちに定まりたる事なし。（以下略）

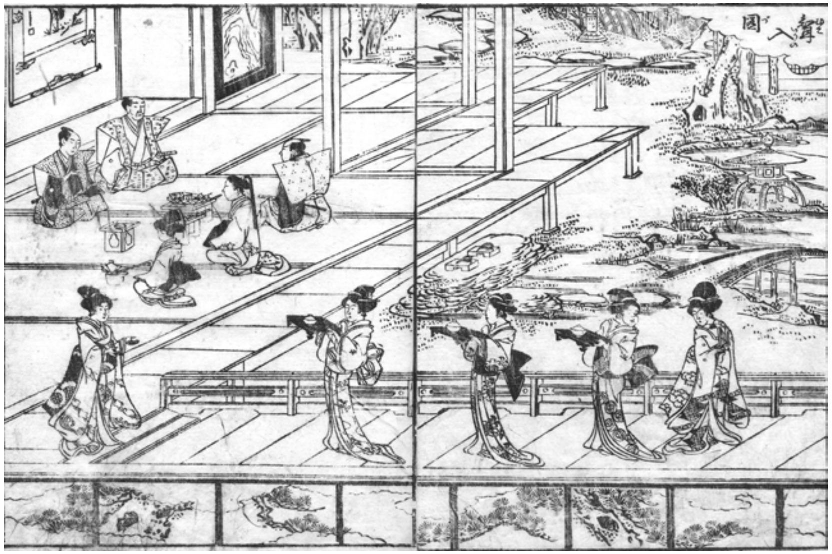
④嫁入りの式――嫁、親の家を出ずる時、首途（門出）の祝い、式三献たるべし。これ「二度（再び）帰るまじ」との暇乞いの盃也。それより乗物に乗り、出ずる跡にて門火を焚く事、「生きて二たび帰らじ」という心也。（以下略）

江戸樂舎用

⑤祝言の座敷――嫁の乗物、掾（えん）・廊下の前へ舁（か）き上げ据え置く。聟出でて乗物に手を懸くるが作法なり。聟奥へ入る時、待女郎、嫁を迎え化粧の間へ伴い、それより座敷へ直り、三三九度の盃ごと、上々方には様々の式法あること也。

⑥色直し――式三献の祝い済みて後、聟の方より色直しの小袖を嫁へ遣わすこと也。嫁、御帳台へ入って召しかえ出で給うなり。下々にては、その座にて白き上着を脱ぎて色直しの小袖を打ちかける也。又、部屋入りの盃は、上臈局（つぼね）の役也。（以下略）

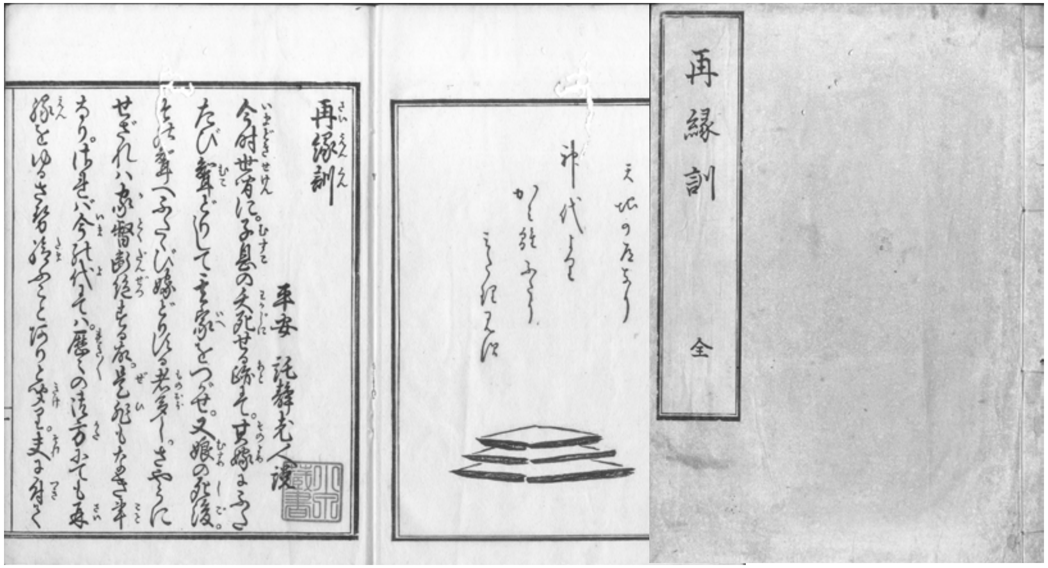
⑦部屋入りの盃事　⑧部屋見舞い――部屋見舞いは、両家諸一門の内室、娘達、又は主たる家来の女房なんど我劣らじと祝儀物を持たせ、ここを晴れと朝とくより来たり、嫁と盃をする也。嫁の姥（うば）差配す。嫁はとかく恥ずかし気にして、多く物言わぬが肝要なり。



⑨聟入り　＊ここで言う「聟入り」は、婿（聟）となって嫁の実家に入る「入り婿」ではなく、結婚後に新郎が初めて新婦の実家を訪れ挨拶する儀式のこと。

ここに掲げた九葉は全て堀田連山画、文化一〇年（一八一三）刊『絵本婚礼道しるべ』の挿絵である。本書は「幼女（いとけなきむすめ）の翫（もてあそび）」に備えて婚礼の概要を絵解きしたもので、言い換えれば、婚礼の流れやそれぞれの儀式の意義や心得などを幼時から教え諭すための教材であった。

伴侶に先立たれた者の再婚心得



京都・専念寺第一七世として精力的な活動を展開した浄土宗僧侶、託静（隆円・順阿）の著で、『託静三訓（衣食訓・再縁訓・老人訓）』の一つ。再婚にあたっては亡き伴侶の墓参を済ませるべきことを教える。文政一〇年（一八二七）の刊記に「社中うばそこ（優婆塞）等施印」とあり、彼の講説の聞書を門人男性の在家信者が協力して上梓したものである。

まず冒頭で、伴侶が死んでも夫婦の縁は切れないため、再婚にあたっては必ず墓参すべきで、無断で再婚すれば災いを招くと戒める。そして、死者の霊を大切にすることは儒仏ともに重んじていること、再婚の目的は家督断絶を避けるためであり、先祖や亡き伴侶の霊を供養し父母の孝養をするためであること、亡き伴侶の命日には再婚相手とともに墓参すべきことなどを諭す。

そして、これらをその通り実行して災難を免れた実例が数多くある故、これらを知らずに再婚した者は、今からでもそのように行うべきだと促す。

『託静三訓』は、人生において誰もが遭遇し得る衣食・再婚・老いの問題を、霊魂不滅、殺生、因縁果報などの仏教思想に基づいて教えたものだが、世俗の教訓に深入りする託静に対して「法中いらざる俗間の世話」と批判する者もいたらしい。だが彼は『衣食訓』で「人間の道を説くのは仏道に入る下繕い（下準備）である」と反駁した。彼は、七六歳で入寂するまでの三十有余年、専念寺で五千回に及ぶ講説を行う一方、約四〇点もの著作を著した。まさに民衆教化に明け暮れた生涯だったと言えよう。

ごあいさつ

縁切寺満徳寺資料館では、江戸時代の歴史を理解するとともに、男女平等社会の実現を願い、その啓発の一助となるべく、数多くの特別展を実施してまいりました。

今年度は、「江戸の婚活――出会いから結婚まで――」と題し、双六・絵本・女訓書・往来物等の資料を通じて、当時の婚礼に対する意識や婚礼祝儀における格式の違い、また、現代人顔負けの「仲人ビジネス」や「婚活・婚礼マニュアル」、さらに再婚時の心得まで、色々な視点から江戸の結婚事情を紹介いたします。

今回の特別展は、往来物研究の第一人者で、過去に当館が開催した特別展「女往来物の世界」等のほか、「江戸の道徳教育Ⅰ（寺子屋と徳育）」「江戸の道徳教育Ⅱ（地域社会と人づくり）」「礼法書に見る江戸の躾方（礼節社会の誕生を探る）」なども企画・監修していただいた小泉吉永先生に、資料の借用を含め、全面的なご協力をお願いして開催することができました。ここに深甚なる感謝の意を表します。

太田市立　縁切寺満徳寺資料館